三浦朱門

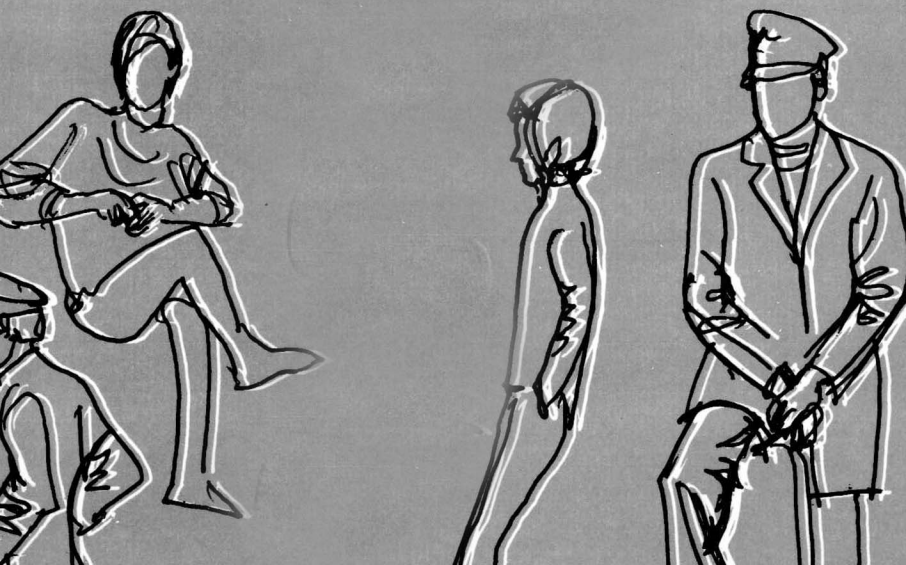
風のまにまに

（上）

風のまにまに

（上）

サンケイ出版



風のまにまに（上）
昭和61年4月10日　1刷
昭和61年5月20日　2刷
定価　一四〇〇円
著者　三浦朱門
発行者　神谷光男
発行所　株式会社サンケイ出版
東京都千代田区麹町六の一の二五（〒102）
TEL（東京）二三四―一五九一（代）
大阪市北区梅田二の四の九（〒530）
TEL（大阪）三四三―一二二一（代）
印刷・製本　図書印刷
※万一、乱丁落丁の場合はお取替えいたします

© 三浦朱門　1986　Printed in Japan　〈検印省略〉
ISBN 4―383―02470―X

もくじ

ホテルと待合　5
タベルナ　サトシ　27
帰　京　51
振袖の娘　71
お正月　94
遊　民　118
求婚者　139

先輩後輩 163
女らしさ 186
ライバル 209
大人同士 231
もてない男 248

装画／三芳悌吉
構成／安彦勝博

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

風のまにまに

（上）

（この作品は「サンケイ新聞」に昭和59年11月1日より同60年10月31日まで連載されたものです）

ホテルと待合

それにしても、ホテルの人間というのは、どうしてこうもロボット人間みたいなのだろう。胸の名札によると片山というこの男は、

「さような予約は承っておりません」

と無感動に繰り返すと、目を広いロビーに向けて、部屋の予約の件については、もう取り合わない、という態度を露骨に見せた。

「そう言われても困るんだけどな」

哲(さとし)は弱々しくつぶやいた。実際、部屋がないと困るのだ。東京で学会があって、哲の先生たちが名古屋から上京してくる。そのために東京生まれの大学院生の哲がホテルの予約をすることになっている。今日、教授がくるので、念のためわざわざここまで出向いて確認に来たらこの始末である。

もっとも直接に交渉したのは哲ではない。彼のサンタ・マリア大学と姉妹校の聖ヨゼフ大学の、やはり大学院生がやってくれたはずだった。本来なら哲は、今日が初対面の、聖ヨゼフ大学の院生に文句を言いたいところなのだが、それができない。相手というのが女性で、しかもなかなかの美人なので、責任を取れ、とは言い難いのである。

(だからさあ、男女同権だなんて女なんかをのさばらせるから、こういうことになるのさ。それにしてもいい女だ)

哲は心の中でそうつぶやいたが、さあらぬ体で、

「野島(のじま)さん、どうします?」

と尋ねた。別に詰問する調子ではなかったつもりだった。それなのに、それまでホテルのクラークと哲の会話を聞いていた彼女が、突然、ワッと泣きだした。
（女って、これだからやんなっちゃう。世の中、泣いて済むことは何もないのに）
「野島さん、泣かないでください。ちょっと考えましょう。ちょっとこっちへ」
ホテルのフロントの前で泣かれるとみっともない。哲は彼女の肩を押して、近くの大きな柱の陰にひっぱっていった。
「泣かないで、テンコさん」
「ノリコです」
今までワンワン泣いていたのに、哲が名前を読み間違えると、すかさず訂正する。一体、この女、何を考えているのだろう。名刺には野島典子とあったが、
「野島です」
と姓だけしか言わなかったから、ノリコと読むのかとも思ったが、ちょっと意地悪をしただけなのに、全人格を侮辱されたようにキッパリと間違いを正す。
「どうも失礼しました」
哲は頭を下げた。典子はまた泣きはじめる。気がつくと、そばを通る人が妙な顔をしている。考えてみると当然であろう。年頃の男女がホテルの柱の陰で、女は泣き、男は謝っている。となると、二人の間に何かがあったみたいではないか。
「お互いのためだ、別れよう」
哲はそう言って、ホテルを飛びだした。
東京は哲が高校までいた都市である。知人も沢山いる。誰かに見られて、
「哲の奴が、ホテルのロビーで女に泣かれてたぜ。あいつ、女にもてる口じゃないが、あの女をホテルにつれこんで悪いことをしたのじゃないか」

などという評判がたっては具合が悪い。それは典子にしても同じことだろう。
典子もハンケチを目にあてて出てきた。
「泣かない、泣かない」
哲は風を押し返すような形に両手を動かした。
「別れよう、なんてひどい。あんな風に言われて知らない人が見たら、あなたと何かあったみたいに思われるでしょう」
「そうか、なるほど、悪かった、済まない」
謝りながら、謝るのは典子のほうではないか、と哲は不満だった。そもそも彼女が部屋の予約をちゃんとしておかなかったからだ。しかし先生方が到着する前に念のために確かめておいてよかった。
「あたしはチャンと部屋を頼んでおいたのです。テツさんから研究室に連絡があった時……」
「テツではなくてサトシと読みます。生まれつき賢いからサトシ。人をさとし導くからサトシだという説もあります。姓はクスノセと読むんです」
「じゃ、楠瀬哲さん、どうしたらいいかしら」
「うん、そうね、別のホテルに心当たりがある」
「じゃ、そこへ行ってみましょう。あたし車を持ってきたから」
典子の車というのは赤い小型車であった。乗りこむとかすかに女の匂がした。
「どちらへ？」
「大手門ホテル。大学の同級生が勤めてましてね。ホテルははじめはドアマンからやるんです」
大学の同級の梶川は今はフロント・デスクのクラークだが、最初はドアマン、次は客の荷物を持って部屋に案内するボーイ。そういう接客業務を半年やってから、掃除、洗濯、調理場と内部の職場を半年。
そして今年からやっと背広を着て、フロントに勤務するようになったはずだった。

梶川は大手門ホテルのリセプションにいた。哲が典子をつれて近づいて来るのを知ると、一瞬、値踏みするように典子を眺めた。
「部屋を二つ、何とかならないか」
と哲が言うと梶川は彼を人のいない隅に連れていった。
「お前ら有名人じゃないんだから、別々に部屋をとって後でこっそり一緒になる必要はないって。一部屋で充分。それにしてもいい女を物にしやがったな」
「違います」
哲のすぐ後ろについてきていた典子がキッパリ言った。梶川がホッとしたように言った。
「そうでしょう。あなたは楠瀬には勿体ない」
「お前、何言ってるんだ。不潔な誤解はよせ」
そういいながら、哲は梶川を小突いた。
「じゃ何で部屋がいるんだよ」
梶川はホテルマンにはあるまじき、学生時代のぞんざいな言葉になった。
哲が事情を説明した。東京で学会があって、どうしても哲は指導教授たちの泊まる部屋を確保しなければならないこと。典子が手続きしたはずなのに、断られたこと。
「で、シングル二つ都合しろってのか。そりゃ無理だよ。シングルというのは採算がとれないから、ただでさえ数が少ないんだ。ツインなら、何とかなるかもしれない。ツインでいいか？」
「仕方がねえだろ」
「偉そうな顔ができるのはコッチなんだぜ」
梶川が恩に着せた。しかし哲としては、典子を疑う訳ではないが、予約した部屋がなくなった事情がどうしても納得ゆかない。
「でもそういうことってあるのかな、部屋を頼んだのに知らぬ存ぜぬということが」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「多分、典子さんの留守に、お宅へ確認の電話があったと思うんだ。最初の依頼は電話でしょ。その時に前金入れとけば安心なんだけど、ホテルとしては電話の予約というのは相手が見えないだけに安心できないから、直前に確認の電話を入れるんだ。その時に留守だったとかいうことはないですか」

典子がパチンと指を鳴らした。

「父ですわ、きっと」

哲にも想像がついた。例えば昨日、ホテルから確認の電話が入る。

「野島典子さまのお名前でシングル二部屋の予約を頂いておりますが、御予定に変更ございましょうか」

彼は最愛の娘がホテルに部屋を予約したというだけで、さては男と一緒か、と疑い、次ぎに、これは間違いで、典子の友達が自分が使う部屋を娘の名前で予約した、と思いこむ。そして、

「いえ、それは間違いです、はい、予約は取り消して結構です」

とでも言ったのだ。昔だと、予約も取消もメモ用紙か何かに書きこむから、その経過が残るのだが、近頃の事務はコンピューターを使うから油断がならない。機械はバカ正直だから、一旦、抹消すると跡形もなく消滅してしまうのである。哲も資料の統計処理をしていて、うっかりキーをたたき違って、一時間かけた計算がパーになった苦い経験を持っている。

「私が昨日外出から帰ってきたら、父が近頃の女子大生には、堂々と男とホテルに出入りするのがいるというが、と謎をかけるようなことを言うんです。バカバカしい、と相手にしなかったけど、あたしの留守中にきっとホテルから電話があったんだわ」

「まあ、そういうところでしょう。で、楠瀬、どうする、ツインでもいいか」

カウンターに入って、コンピューターの端末機のモニターをのぞいていた梶川が哲に声をかけた。

「今さら困るともいえないじゃないか」

部屋は何とかなったが、先生方には、二人で一部屋になった事情を説明して謝らなければならない。

そんなことはけしからん、許せぬ、と怒るような偏狭な人たちではないが、一応、シングルを二部屋確保しておいたと報告していたから、変更を納得してもらう必要はある。哲はどっち道、東京駅の新幹線ホームまで迎えに行くことになっているが、どう説明したらよいか考えていたら、典子が彼の心中を察したのか、

「先生は何時の列車でお出でですの？　あたしも責任上御一緒してあたしの責任だと申しあげます」

いいですよ、と答えたかったが、哲はあえて断らないことにした。典子はあっさり別れるのは勿体ない女の子である。おれの顔を潰した責任をとってくれる積りだったら、さっさと裸になってもらおうか、とは事は運ばないが、それでも落とし前をつけさせる形で彼女に食い込んでやろう、と哲は考えた。

「十六時八分、ひかり七十号」

哲は暗記している時刻と列車番号を、一応は手帳を開いて確認した上で言った。腕時計をのぞいた典子はちょっと首をかしげた。

「それだったらまだ二時間も余裕がございますから、父の責任を追及しに参りましょう。お出でになりますか」

娘のおやじなどには会いたくなかったが、いやだと言えば、それではここで、と置き去りにされそうだった。

「いえ、謝っていただかなくともいいんです。こうしてとにかく、部屋は確保できたのですし」

哲の痛い所は本音は別れたくないだけなのに、形の上では彼女のミスを追及する振りをすることだ。

「でも、あたしの気がすみません。父というのは娘を信じていないんです。私の帰りが遅くなりますでしょう、門の脇に黒い影が見えるんです。父が私が一人で帰ってくるか、男と一緒でないか、見張っているんですわ。私が一人だと安心して気が付かれないように、家に駆け込んで、それこそ何食わぬ顔で、『おお、帰ったか』と迎えるんです。今日という今日は是非とも父をこらしめてやらなくては。

第一、学部ならともかく、大学院の院生の娘というのは、もう一人前の人格として認めてもらいたいわ」

その点に関しては哲も同感だった。大学院生として国から僅かながら奨学金をもらっている。サラリーマンになった同級生には及びもつかないが、バイトをすれば自立できない金ではない。

しかしいい年して大学院だなどというと、世間は無収入の脛かじりとしか見てくれない。もっとも奨学金も呉れるなら呉れるで、サッパリしていいのだが、形は貸与なのだ。ずっと研究職に従事していれば、返済の義務は消滅するのだが、貸与された金は、自分の金であって自分の金でないような、たとえて言えば、サラ金で生活しているような気がするのである。

「ね、父をおどかして、真相を告白させてやるわ。だから手伝って」

典子の父の会社というのは、日本橋の昭和通りに近い中型のビルにあった。一階は客を応接するスペースと見えて、ホテルのロビーのように広々としたところにかなり上等な椅子やテーブルが配置してある。典子はその受付につかつかと歩みよると、

「野島良治をお願いいたします。私は良治の娘です」

と言った。

「あ、社長のお嬢さまですか」

受付の女の子はちょっと慌てたように姿勢を正して電話機を取り上げた。

「どうぞ、社長室へ、とのことでございます。社長室は四階でございます」

哲は典子がいい、と思ったのは、彼女が受付のOLに社長令嬢風を吹かさず、腰が低かったことだった。そのOLだって、家に帰れば、社長令嬢かもしれないのである。だから哲は彼女に頭を下げて、

「お世話さまです」

と言ってエレベーターに乗った。

エレベーターを下りた所に、典子とよく似た鼻筋の通った目の大きい男が立っていて、

「典子、一体、どう……」
そこで彼は哲を見て、不思議そうな顔をした。
「あのね、お父さまの顔で、ホテルの部屋とれないかしら、シングル二つ欲しいんだけど、ツインでもいいのよ。あたし、この楠瀬哲君に頼まれて、部屋をとったんだけど、行ってみたら、キャンセルされていたの。その部屋は彼が恋人と今夜使うはずになっていたから、無いと困るのよ。恋人というのが、家庭がうるさい家のお嬢さまで、直接に部屋をとると後で知れると具合が悪いんですって。あたしがチェックインしておいて、鍵を渡すの。めいめいがシングルの部屋に泊まって、夜になってから、そっと相手の部屋に通うんですって」
「典子、お前はいつからそういう友達と付き合うようになったんです」
野島氏はエレベーターの前で怒りはじめた。
「あら、だって、そんなこと、常識よ。あたしだって恋人ができたら、楠瀬さんに部屋を秘密にとってって頼むと思うわ」
「そんなことは許しません。だから近頃の若い者はふしだらだなどと思われるのです。昨日、ホテルから確認に電話があったから、お父さんはそんなふしだらは嫌いですから、断っておきました。それがいけないというなら、その青年でも、相手のお嬢さんでもいいから、親御さんに会いましょう、そしてお父さんのやったことが悪かったかどうか聞いてみましょう」
「ほうら、やっぱりお父さんだわ、ね、言った通りでしょう」
典子は得意気に言って哲を振り返った。父親を怒らして、真相を告白させるのが典子の作戦だった。野島氏は、はてな、という風に哲と娘を見比べた。ホテルだの部屋だのというから、カッとなってしゃべったものの、からかわれたか、という気がしてきたようだ。
「いえ、実は」
哲が口を出して、学会で上京する学者のために、典子がホテルの部屋を予約した経緯を説明した。

「いや、そうでしたか、私はまた、典子が仲間の桃色遊戯の手伝いをしているかと思いまして……」
「その桃色遊戯というのをやめてよ。今時、そういう言葉はなくなってるの」
「じゃ、なんと言うのだね」
「そういう行為を特別に見る習慣がなくなっているから、その言葉も死んだのよ。マッポは不純異性交遊などと言っているらしいけれど」
「そのマッポというのは何かね」
「ポリのことよ」
哲には典子が父親を脅そうとして、精一杯凄んで見せていることはわかったが、その割に父親が平然としているのは、脅しがきいていないからだ、と見当をつけた。
「それでは、私はこれで」
とその話を切り上げさせるために、哲がエレベーターを呼ぶボタンを押そうとするのを野島氏が止めた。
「いや失礼しました。どうぞ私の部屋へ。コーヒーくらいはお出しできますから。で、ホテルの部屋は何とかなったのですか。いざとなれば、ウチの会社も取引きのあるホテルがありますから、二部屋くらいなら何とかなるかもしれません」
典子がまだ父親を責める口調を変えずに言う。
「楠瀬さんのお友だちが大手門ホテルで働いていらっしゃって、その方がツインの部屋を一つ見つけて下さって。でもシングル二つの方がいいんだけれど」
社長室に通されてから、野島氏は、
「そのお二人はどうしても、同じホテルである必要はあるのですか」
「そんなこともないと思います」
「だったらこうしましょう、私がシングルの部屋を一つ、アジアホテルで用意させます。大手門ホテ

ルのツインの方は偉い先生にお泊まりいただいて、こちらのシングルには、もう一方においでいただいたら。そして失礼ですが、アジアホテルの方はこちらの落度ですから、費用のほうはこちらで処理させて頂きます」

「いや、そんなことをして頂くと」

哲が辞退しているうちに、野島氏は電話で秘書を呼び出して、必要なことを言いつけてしまった。

「じゃ、典子、秘書の木村君を手伝って、ホテルのことをすませて。楠瀬さんのホテルはいいのですか」

「ええ、私は親の家が東京ですから」

典子が部屋を出て行くと、哲は何だか心細い。

「私は陸上ばかりして成績が悪かったもので、都落ちです。高三の二月まで、陸上を練習してまして、四月の入学後の体力検定の時にも、全然、体力は落ちていませんでした。その時の記録は開学以来の新入生新記録として、今でも体育の研究室に残っているはずです。大学院生としては、記録が体育でなくて、学科だといいんですがね」

「あの娘が女だてらに大学院にゆく、などと申しまして、参考までにうかがうんですが、大学院に入って、何かいいことでもあるんですか」

「ないでしょうな」

哲はあっさり言った。それは実感である。

彼の親類は見渡す限り、大学の教師である。両親はもとより、たった一人の伯母は画家だが、その夫も大学の教授であり、祖父もまた小さな私立大学で教育学を教えている教授だった。伯母の家の子供は長男はまた大学教授で長女は当世はやりのイラストレーターである。こういう家系では大学を出ただけでは、まだ半人前なのである。

さいわい先祖代々、あまり秀才でないから、一流大学を出る必要はないが、三十近くまで就職をし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.